
白い暗殺者～番外編～

い～ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い暗殺者〜番外編〜

【Nコード】

N6857B

【作者名】

いーちゃん

【あらすじ】

東武風牙と柊香澄の昔の話。風牙がフラれる話。それと香澄のフアーストキスの話です。本編とはほとんど関係がありません。番外編だけでも楽しんでいただけます。

今は8月。

夏休みの真っ只中である。

風牙と香澄が中3の時……つまり2人が黒征学園に入る1年前の話である。

この夏には風牙には彼女がいてその彼女に振られるエピソードを皆さんに教えましょう。

風牙はせっかくの夏休みなのに彼女である寺嶋夏実と全く遊ぼうとせずに自由な休みを過ごしていた。

夏実は何回デートにさそっても断り続ける風牙に痺を切らして電話をかけた。

「もしもし！？風牙くん！？」

「あゝ夏実か？？今日は……。」

「今日こそデートしてもらいますー！！」

「今日は……用事があつたり……。」

「どんな用事！？宿題とお墓参りと学校の呼び出しと前々から入ってた友達との約束って言い訳はもう言ったわよ。」

「うつ……！！」

つて事で風牙はとうとう根負けしてデートをする事になった。

「夏実はすぐベタベタくっついてくるからなあ。このクソ暑いのにそれが嫌で断つてたのに。」

ちなみに風牙の部屋の冷房器具は只今故障中。

「しかもあいつの事だから今日は泊まって行くとか言っただろうな……。」

独り言を言いながら風牙は部屋を片付ける。

「キスしたら満足して帰るかな??」

そう言つて風牙はベットに寝転がった。

「……い。ふ……が。」

風牙は快適な睡眠から現実に取り戻される思いを感じた。

「風牙！――そろそろ起きてよ――！」

「もう……ちよつと……。」

「こら――！寝るな――！」

風牙は自分を強く揺すっている手を掴んでベッドに引き込んだ。

「え！？ちよ、ふ、風牙！？なにす……！！！」

反抗をする声を封じるために風牙はキスをした。

始めは抵抗しようとしていたが風牙が抱き寄せるとおとなしくなった。

「バンツ――！！！」

とドアが強く開けられる音がする。

風牙が唇を離して振り向く。

「おい――！勝手にドアを……。」

親だと思つて話しかけた風牙の目に飛んだのは夏実だった。「え……と……。」

意味がわからない風牙は自分の腕にある柔らかい感触の元を見る。

そこには顔を真っ赤にした香澄がいた。

「……何してんの？風牙くん？？」

夏実はまだ穏やかに話しかける。

「あ、これは――！起こされたから夏実だと思つて、うるさいからキスし……。」

「言い訳しないで――！」

風牙は口をパクパクさせる。

「やっぱり浮気してたの？？ふん。柊さんだっけ？？幼馴染みだよね。」

「あ……これはじ、事故で……。」

香澄も弁解をしようとす。

「何?? あんたも共犯!? 抱き合ってキスしてたくせに。」

香澄にも怒りを向ける夏実。

「あんた風牙くんに私がいるの知ってるでしょ!? あなたが風牙くんの事好きなのは構わないけど風牙くんを誘惑しないで!!」

「なっ!! す、好きな訳ないでしょ!!」

「じゃあ何でキスしてたのよ!？」

「だから事故で……!!」

「言い訳するな!! 泥棒!!」

言い争いが始まってしまった。「これが修羅場かあ。人生初だなあ。」

風牙は呑気に独り言をつぶやく。

「だいたい、私に文句言わないでよ!! デートしてもらえないくせに!!」

「う、うるさい!! ただの幼馴染みなのにでしゃばらないで!!」

「私に文句言うな!!」

やっと責任を感じたのか風牙が止めに入った。

「おい、もうやめと……」

「「あんたは黙ってて!!」」

あえなく粉碎。

かなり立場の弱い風牙であった。

それから数分間、香澄と夏実は言い争いを続け、今度こそ止めようと風牙が近付いた。

「俺が悪かったから。もう言い争いやめろよ。」

そう言つて二人の肩に手を置く。

「パァン!!」

といい音が鳴り響いた。

夏実が風牙の頬を叩いたのだ。

「うるさい!! あんたといったら疲れる!! もう別れて!!」

「……。」

反応しない風牙を睨み付け、夏実は部屋を出ていった。

「追い掛けなさいよ。」

香澄が風牙を見ずに言う。

「追い掛けても無駄だろうな。完璧に嫌われたみたいだし。」

「どうせあんま好きじゃなかったんでしょ?」

「そんな事ねえよ。大恋愛ではなかったけどな。」

珍しくテンション低めの風牙。

まだ怒りが治まってない香澄。

気まずい空気が流れる。

「あんたが悪いのよ。ほつたらかしにするから。」

「今回は少なからずお前にも責任があるだろ。」

「ないわよ。私のファーストキス奪ったんだからそれくらいの代償は当然です。」

「失恋の慰めに今度は香澄からしてくれよ。」

「絶対嫌!!」

と、まあ今ではいい感じの二人ではあるが昔はこう言った感じだったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6857b/>

白い暗殺者～番外編～

2010年12月14日21時06分発行